

慈濟 252

ものがたり

慈濟基金會
2017 年 12 月

TZU CHI ● ツーチャー



表見返し●

文・證嚴法師/訳・済運/撮影・李白士

勤めて善を奉仕する

諸法は善なる本性によつて

大衆と接することを立願すべきです。

傲慢になれば、抜け出すことができず

卑屈になれば、良能を発揮できません。

常に平常心を持ち

勤めて善を奉仕することです。



善の扉

「慈濟ものがたり」をご自宅までお届けします

各慈濟連絡所では無料で配布しています。

ご自宅までお届けする場合の郵送料は以下の通りです。

◎中国語「慈濟月刊」(月1冊) 台湾国内：年間NT\$165

同じご住所への送付で月6冊以上であれば年間NT\$999

20冊以上ご希望の方は読者サービスセンターにお電話ください

◎隔月刊行の英字誌「Tzu Chi Buddhism in Action」(2カ月に1冊)

台湾国内：年間NT\$80

2冊以上ご希望の方は読者サービスセンターにお電話ください

◎日本語の「慈濟ものがたり」(月1回発行。1冊)

台湾国内：年間NT\$120。

2冊以上ご希望の方は読者サービスセンターにお電話ください

日本に在住されている方は慈濟基金会日本支部にご連絡ください

郵送料のお振込み：台湾郵局口座：19905781 口座名：慈濟傳播人文基金會
読者サービスセンター電話番号：02-28989000内線1165
上記の郵送料は台湾国内に限ります。海外または離島の方は読者サービスセンターにお電話ください。



オンラインでの送付
申し込みはこちらへ



●インターネットでもご覧いただけます。URL <http://web.tzuchiculture.org.tw/index.php?s=7>



慈済ボランティアの協力で、宜蘭刑務所の女性収容区に液晶テレビが設置され、美と善を伝える大愛テレビをはじめ他の良質な番組を視聴できるようになった。罪を犯した彼女達が、テレビを通して社会とのつながりをもてるようになり、刑務所内での矯正教育に役に立つはずである。（撮影・蕭耀華）

目次

【社論】

清水のしずくが沢を潤すように

慈願／訳 6

【主題報道】

鉄格子の中で見た大愛

心嫻／訳 10

鉄格子の中に愛を届ける慈済の青い鳥

惟明／訳 24

教化こそが収容の目的

葉美娥／訳 31

一滴の水は一筋の光明に等しい

閻麗妮／訳 36

【慈済国際】

生命力あふれる勇者―鄭傳杰

性和／訳 42

車椅子テニスの世界チャンピオン

ベジタリアンヒーロー

慮暉／訳 50

【慈済台湾】

見えない心労

本諦／訳 54

【證嚴法師のお話し】

生命の共同体を護ろう

慈願／訳 68

【慈済月刊・慧命を守護して五十年】

海外開拓者は刊行物で慈済を広めた

済運／訳 80

【納履足跡】

未来は現在の積み重ね

済運／訳 100

慈済大事記【十一月】

済運／訳 105

清水のしずくが沢を潤すように

刑務所は人を閉じ込めるだけでよいのか。それも老いるまで……。

法務部（法務省に相当）の矯正署の統計によると、台湾の刑務所の収容人数は定員を超えており、管理上数々の問題が生じ、補導指導の実施にも困難をきたしている。

受刑者の半数近くは麻薬常習者で、そのうち再犯者が半数以上に上る。彼らは出所後、社会に受け入れてもらえず、昔の悪い仲間のもとへ戻って、さ

らに深刻な違法行為に走ることが多い。また、若い頃から刑務所への入出所を繰り返して、高齢になった者もいる。

受刑者を取り巻く環境を詳しく調べると、多くが問題のある家庭に育ち、幼い頃から劣悪な環境と向かいあっていた。また、もともとはごく普通のサラリーマンで、心身をより一層強壮にして仕事に励み、家族を養いたいと思っていたのが、知らぬ間に薬物に染まっていたというケースもある。

学者の陳恵敏氏が、長期にわたって刑務所の問題をくまなく観察したところ、受刑者は入所前、「自信がない」という心理状態にあったことを発見した。彼らは人の言葉や表情に敏感で、ごく普通の社会と隔たりを感じている。彼らの社会復帰を支援するためには、「自分は受け入れられている」と感じさせることが重要である。

「慈済月刊」編集部には時々受刑者からの投稿や手紙が届く。封筒の中に百元（一元は約三・五円）のお金を入れて、寄付したいという人や、大愛テレ

ビや「慈済月刊」で慈済が骨髓寄贈や国際支援を推進していることを知って、自分も参加したいと手紙を静思精舎によこす人もいる。こうしたことから、人は誰もが潜在的に善良であることが証明されているといえる。

本号のテーマ報道の中で、宜蘭刑務所指導員の頼文玲さんは、「刑罰とは社会大衆が求める正義理念だろうか」という疑問を提起している。宜蘭刑務所の謝昆奇所長は、「多くの人は愛に感動した体験によって善に回帰する」と言った。この愛の力は宗教と慈善団体からきている。

長年、慈済ボランティアが専任指導員の欠員を補い、素晴らしい輔導の効果をあげ続けている。

慈済人の刑務所ケアの歴史は二十年を越え、台湾全土にわたっている。刑務所から要請を受けると、地元のボランティアがチームを組織して刑務所を訪問し、関心を寄せ、励ましている。読書会や手話教室、仏教経典を扱った

演劇を行い、その中で受刑者が自らの力で悟り、習気業力（じっけ）を改めるよう支援している。

自分もかつて受刑者だったというあるボランティアは、自分の経験を話して、多くの受刑者の模範となっている。ボランティアはまた、受刑者の実家を訪問して、彼らの状況を聞き、受刑者と家族の関係が元のように円満になるよう架け橋になろうと努めている。

刑務所という場所は、誰もが恐怖を覚える場所だ。だが、宗教の情熱と感動は、人に恐怖をのり越えさせるほどの影響力を及ぼすことを、多くのボランティアが感じ、悟っている。まるで一滴一滴の清らかな水が集まって、無数の心田を潤しているかのようなのである。さらに多くの人々が受刑者に関心を寄せ、この善の行列に参加するよう願ってやまない。

（慈済月刊六一一期より）



過ちを犯し

自由に別れを告げた

◎企画・李委煌、邱如蓮 訳・心嫻 撮影・蕭耀華



刑務所の中は
外とは別世界



約束する

絶対にここへ戻らないと

鉄格子の中で 見た大愛

慈濟ボランティアは刑務所の受刑者と出会う。

それぞれのは試練を乗り越えていく過程を
お互いに大切にしなければならぬ。

受刑者は、善と悪が綱引きする中で勇気を奮い立たせ、
諦めずに頑張れば、人生をやり直すチャンスがある。

一方、ボランティアは、光と闇の世界を出入りして、
常に自分の初心を確かめながら、
自ずと尊重と慈しみを体得できる。

法務部矯正署の最新の統計によると、
二〇一七年七月現在、台湾の更生機関に
は六万二千四百四十五人が収容されてい
る。五千五百六十八人も定員を超過して
いる。受刑者のほぼ半数が薬物常用者で、
再犯率が高く、入出所を繰り返している。
更生機関の定員超過の状況は、すでに
長年の問題である。政府関係者が二十年
以上前に静思精舎を訪れ、「刑務所が不
足しており、増築する必要がある」と話
したことがある。その時、證嚴法師は「法
律で犯罪を防ぐのは非常に難しいこと
です。犯罪を減らす方法はただ一つ。良知

を啓発することです。刑務所を建てるよ
りも、学校を建てた方がよいのではない
でしょうか」と述べた。

台湾の監獄行刑法第一条に、「懲役や
拘禁の執行により、受刑人が悔い改め、
社会生活に適応できるようにすることを
目的とする」と明記されている。宜蘭刑
務所の謝琨琦所長も、「刑務所は単に犯
罪者の自由を拘束し、社会から隔離させ
る目的だけでなく、教化する役目があり、
過ちを犯した人が改心して社会に復帰で
きるよう支援する場所であるべき」と認
識している。

2017年7月末現在、
台湾全土の定員56877人の更生機関に
62445人収容されている。9・8%の超過だ。

ネットの時代では、一日に膨大な量の情報が千里を駆け巡る。長年、刑務所で生活を送った受刑者が出所し、すっかり変わってしまった世界に溶け込めないことは、社会問題となっている。中には、社会に復帰できずに元の道に逆戻りし、家族の期待を裏切って、悲しませてしまうということもある。そのため、謝琨琦

所長は、慈善団体や宗教団体が刑務所で受刑者に寄り添い、早めに社会に適応するよう支援することに賛同している。

これらの「学校」は風景も普通の学校とは異なっている。かつて花蓮刑務所で刑に服していた偉さんは、「窓から空を見ると、縞模様になっていました」と語った。刑務所を学校と同等に扱うことは

できないが、受刑者の人生の方向を正す手伝いはできるかもしれない。

四万二千人の受刑者をサポートしてきた。

真剣に学び、 卒業したら親孝行しよう

台湾における更生機関は、刑務所、留置場、薬物依存更生施設、少年院、少年鑑別所など五十カ所以上に上る。慈済基金会の最新の統計によると、二〇一七年一月から六月までの間、延べ四千人の慈済ボランティアを動員して二十数カ所の更生機関を訪問し、半年間でおよそ

慈済ボランティアは勉強会を催し、慈善に関する経験談や職業訓練などを行っている。また、家族に手紙を書くように励ました。中には慈済に宛てて手紙を送ってくる人もいる。手紙を受け取ると、ボランティアは喜んで一通一通に返事を書き、励ましている。

受刑者は親の健康が心配でも、焦燥に駆られるだけで、何もできず、悩んでいることが多い。慈済ボランティアは、手紙のやり取りを通して受刑者の気持ちを

●中和と永和の慈済ボランティアは長年、台北刑務所で受刑者に付き添って来た。紺と白の制服の隊列は、台湾全土の更生機関で見かけられる。愛で刑務所の高い塀を突き抜け、忍耐でさまよった心を感化することを願っている。（撮影・蕭耀華）

落ち着かせ、家族の状況を理解する。必要であれば代わりに家族を訪問し、家族の生活を支援することもある。受刑者が安心して刑に服し、将来改心して新たな人生を歩むよう期待している。

女性受刑者が「おばあちゃん」、「お姉ちゃん」と慕う女性ボランティアは、彼女たちにとって力強い支援者だ。

花蓮刑務所付属正徳高等学校で勉強している受刑者の張さんは、卒業式の時、多くの同級生の家族が来ていたが、自分だけ誰も来てくれず、寂しい思いをしたと話す。「その時、神さまが私の心を読み取ったかのように、突然、何人もの慈済ボランティアが壇上に上がってきて、私が卒業証書を受領したのを喜んで、一緒に写真を撮ってくれ、内心の切なさを和らげてくれました」

宜蘭刑務所で指導員をしている頼文玲さんは、「一度罪を犯すと、烙印を押されたかのように、軽蔑の眼差しを向けら

れやすいため、人生をやり直すことは容易ではありません」と指摘した。かつて受刑者だったある慈済ボランティアが、刑務所で自分の過去の経験を話して分かち合う時、「刑期を終えて出所した後、常に『悪人』という二文字が付いて回ります。もし、その運命に打ち負かされたくないければ、努力して社会復帰を遂げたことを見せるしかないのです」と言いきかせた。

台湾全土の慈済ボランティアネットワークによって、近くに住む受刑者やその家族に付き添うことができる。受刑者が



出所した後、犯罪更生者で組織する慈済のボランティアチームが、彼らの社会復帰に付き添う。出所した更生者は、積極的に慈済に連絡し、新しい人生の起点として社会に恩返ししようとする人も少なくない。

宿命ではない 迷いから正道に返る

「人生で最大の懲罰は後悔である」という静思語は、受刑者の心境を如実に表している。新竹刑務所にいる受刑者の周

さんは、慈済ボランティア宛ての手紙に、「慈済の読書会に参加したり、出版物を読むと、私は過去の自分の行いや物事を振り返って反省することがよくあります。私は十代の頃から刑務所に入ったりして、今はもう四十歳を過ぎました。『受刑者』という名札が一生取れないと感じています」と綴っていた。台湾の北から南まで、無数の刑務所に入ったりしてきた彼にとって、唯一違うのは、各刑務所の「囚人服の色の違いと監房のルームメイト」だけだった。

もらった一通一通の手紙はみな懺悔の

涙に濡れていた。中には、熟練した文章や、達筆な文章、深く反省している人もいる。いったい何があって刑務所に入る羽目になったのだろう、また、どうして懺悔する気持ちになったのだろう、と思わずにはいられない。

また、慈済に寄付するために切手を同封してくる受刑者も多い。刑務所内で慈済の出版物を読んで、善意が啓発され、人生を変えたのである。

「教化すれば人の心は啓発することができる」ことを、多くの受刑者の行いが証明している。しかし、そのような社会

奉仕の仕事は容易ではなく、受刑者を本当に更生させるには、本人の固い意志だけでなく、我々の更生者に対する態度や眼差しがもっと重要なのである。

慈済ボランティアが刑務所内で行っているのは、問題が起きてしまった後のケアである。それよりも、日常生活の中で善を啓発し、人心を浄化させ、罪を犯さないよう予防することこそが、慈済が半世紀以上にわたって行ってきた慈善の初心でもあるのだ。

（慈済月刊六一一期より）

宜蘭刑務所で鉄格子の中に

愛を届ける慈済の青い鳥

犯罪が起きる原因を無視すれば、

犯罪は起こり続け、

社会は大きな代価を払う羽目になる。

慈済ボランティアは一人ひとりの受刑者に耳を傾け、

正視して理解し、「感謝、尊重、愛」の心を啓発して、

争いごとをなくすと共に、

魂を迷いから解脱させている。

「なぜ刑務所でボランティアをするの？」「刑務所は磁場が悪いと聞くけど、体に悪い影響はないの？」。人々は好奇心で質問する。確かに、刑務所は司法によって刑罰を実施する場であり、社会の暗がりと称される所である。刑務所にいるのは、刺青を入れ、肩で風をきって歩くヤクザの親分のような人達である。牧師や宣教師以外の人は、できるだけ近づかないようにしているのに、何を好き好んで自ら刑務所の中に入ってボランティアをしようとするのか？

私が刑務所でボランティアをしていることを聞くと、人々は「こんなに小さい

体で、人質にされたり、報復されたりするかもしれないよ、怖くならないの？」と聞く。まず最初の反応は、信じられないというもので、それから、すごいねと言ひ、最後には、無理せず身の安全に注意するように、と言う。

犯罪者の更生支援に携わるようになってから、魂がさまよった人が、まるで台所を出入りするように刑務所と社会を行き来するのを見て、とても残念に思う。こんなに生命力のある人なら、本来自由自在でいるはずなのに、なぜ社会の淵に転げ落ちたのだろうか。彼らはなぜそこから這い上がれないのだろうか。彼らに

は宿命を変える可能性はないのだろうか。どうやって支援したらいいのだろうか。

紺と白の制服に身を包んだ慈済ボランティアは、雨の日も風の日も宜蘭刑務所を訪れている。まるで、青い鳥が鉄格子の内と外を忙しく出入りし、愛と思いやりを届けているようだ。鉄条網が張り巡らされた高い塀の中に、人間の本性の輝きと大愛を見た。人々から忘れ去られた刑務所で、彼らは美しい命の歌を作り出し、最も困難な環境の中で生きていく希望を見出している。

いったい、どんな固い信念があつて、彼らはここまで無私の奉仕してきたのだろう。家族に見捨てられた受刑者に対し

刑者の多くは家族に見捨てられています、そういう人こそっと家族のように思いやるべきです。社会にはまだ温情があり、出所して行く場がない時は、慈済に助けを求めることができるのだと知ってもらえます。彼らが再び悪の誘惑や、プレッシャーを受けた時、慈済ボランティアが適時に的確な助言をし、手を差し伸べることができれば、再び同じような過ちを繰り返さないで済みます」

●以前、受刑者は監房に戻っても何もすることがなかった。寝るまでぼーっと座っているだけだったが、今は大愛テレビを中心に良質の番組を視聴することができ、毎日善のエネルギーを吸収している。また、大愛ニュースを通して、社会で起きていることも知ることができるようになった。

てさえも、家族同然に接することができるのか。

受刑者の「人生教育」と「品格教育」を定着させるために、宜蘭の慈済ボランティアは長期的に刑務所側と更生活動を企画した。積極的な教化クラスへの参加、収容棟全体の世話、芸術や職業訓練クラスの開設、読書会の宣伝、灌仏会の催しなどがある。

当初、彼らはステージの下にいる百人近い受刑者の目線と刺青が怖くて、あまり多く語れなかった。しかし、真心のこもった長期にわたるサポートが、受刑者の冷たく閉ざされた心を溶かした。

沈秀娟師姐によると、「刑期が長い受



●受刑者のことを気かけ、時には小言も言う慈濟ボランティアは、受刑者にとっては母親のような存在だ。（撮影／頼振豊）

慈濟ボランティアで実業家の劉鑑徽は、「逆境に立たされても、簡単に己をあきらめず、挫折を成長のステップにし、一日も早くここから出て、社会に貢献できる人になってください」と述べ、受刑者を励ました。

罪と罰、善と悪

刑務所の収監者の大半は薬物常習者で、少年院の収監者は学校を中退した者の割合が高い。司法は「社会モラルの最

後の防波堤」とはいえ、はたして刑罰は人々が期待しているような正義と公理なのだろうか？

犯罪者を隔離したり、罰したり、高い塀と鉄条網のある刑務所に監禁したりすることは、必要である。とは言え、社会は犯罪者を罰することで美しくなっているわけではなく、むしろ犯罪は次から次へと起きている。

適切な解決策を探さずに、犯罪の発生を許しておいてもよいのだろうか。犯罪が起こる原因を議論せず、純粋な子供が人を殺めた原因を突き止めなくてもよいのか。はたして悪いのは犯罪者その人な

のか、それとも周りの人達への憎悪から出た反撃なのだろうか。人々を怯えさせる犯罪は、犯罪者が過去の耐え難い経験から、自己解放のために生み出したものではないのか。

ある研究報告によると、大半の受刑者は社会の底辺で、さまざまな辛い目に遭ったため、自分を愛することができなくなった。自分を愛せないために、自分を傷つけることによって、感情のはけ口を見つけたのである。大人になって行動に移せるようになった時、彼らは人を傷つけることで、心の欠陥を満たすのだ。結果として、社会は計り知れない悲惨な代



価を払わされることになる。

慈済ボランティアのユニークな考え方は、思いやりで個々の収容者を理解し、その声に耳を傾けている。彼らは人と人のお互いへの感謝の気持ちによって、世の中の争いごとをなくせると信じている。尊重されてこそ、どんな極悪な罪人も癒される。そして、愛があるからこそ、魂が迷いから解放されるのである。

慈済は人への思いやりを出発点に、弱者家庭に援助とサポートを行っている。これは、一刻も待てない急務であり、それによって社会の構造の欠陥を徐々に改善している。受刑者の収容施設がもつと現代の刑の執行理念に合うように、慈済

ボランティアの善の行動がきっかけとなって、社会がもつと刑務所の中の人々に関心を寄せるよう願っている。

時間は最高の鎮静剤であると私は信じている。時間が経つにつれ、人が持つ善良な本質が表に現れてくる。人生は誰にとっても簡単なものではない。しかし、どのような環境におかれても、鉄格子を出入りして愛を届ける青い鳥のように、いつの日か、感謝、尊重、愛の支えの下に、人生の最適な出口を見つけることができるだろう。体は刑務所に閉じ込められていても、自由な心の扉さえ開けば、拘束されていた魂は自由に外へ羽ばたくことができる。

宜蘭刑務所

◎文・謝琨琦（宜蘭刑務所刑務所長） 撮影・蕭耀華 訳・葉美娥

教化こそが収容の目的

過去の更生サポートを見ると、

極めて少数の人格障害者を除いて、

多くの収容者は愛に感動を覚えたことから、

善良な本性を取り戻したといえる。

私たちはあきらめずに取り組み続ける。

一人更生させることができれば、

一つの家をも救うことになるのだから。

私の仕事場は高い壁の内側にあります。人生の道を間違えて、ここで「学習」している受刑者たちに毎日向き合っていると、何とかしてこの刑務所というコミュニティを、もつと人に優しく、和気藹々とした大家庭のような場所にしたいという理想を抱くようになりました。ここで暮らしているメンバーが、心身共に徳を修め、明日への希望に満ち溢れることを望んでいます。そして、刑務所を出る時には自分を取り戻し、愛する人に迎えられる、受け入れられて、新しい人生に向かって踏み出して欲しいのです。

再犯率についての報道があると、人々

は、刑務所の更生指導が正しくないのではないか、犯罪者を数カ月あるいは数年間拘束しても、正道に導くことは無理なのではないかと疑念を抱きます。しかし、収容者の中でも、薬物、性犯罪、家庭内暴力、飲酒運転、強盗、窃盗などその犯した罪はそれぞれ違いますし、しかも複雑な家庭環境や、生い立ちや経歴、さらに身体的、心理的な問題もあります。刑務所内の更生指導員だけでは、それぞれのケースに対して細かく対応しきれないので、「更生サポートボランティア」に来てもらうことで、人手不足の問題を解決しています。

長い間、さまざまな宗教団体や慈善団体構のボランティアが、更生教育施設に歩み入り、団体及び個別による更生支援を行い、受刑者が直面する社会や家庭問題、あるいは心理的な苦境の解決に協力し、揺れ動く心を静ませてきました。これは、刑務所の安定と収容者の心の浄化に、きわめて重要な役割を果たしています。

過去の更生指導経験では、極めて少数の人格障害者を除いて、多くの収容者が愛に感動を覚えたことから、善良な本性を取り戻したケースが多くありました。それで、私たちはあきらめずにこの取り

組みを続けているのです。一人を更生させると、一つの家庭をも救うことになるからです。

この一年間、宜蘭の慈済ボランティアは刑務所で料理を指導してきました。最初はお米を炊くことさえもできなかった女性の受刑者が、今では毎日楽しく学んでいますし、しかも新しい料理を考えて、御馳走が作れるようになりました。ボランティアの劉鑑徽が教える来た日には、皆一緒に健康で美味しい饅頭と壽桃（長寿を祝う桃を象ったお菓子）を作りました。それから、誕生日を迎えるクラスメートのために、毎週誕生日会を行い、壽



●8月下旬、大愛テレビの番組が宜蘭刑務所で放送された。刑務所所長の謝琨琦さんは受刑者に対し、これらの良い番組に恵まれたので多くのことを学び、考えを改め、将来社会復帰につなげて欲しいと励ました。

桃で祝っています。また、月曜日には菜食を推進し、健康で環境にやさしい活動を応援します。

ボランティアが開いている勉強会では、受刑者に自分の人生を前向きに考えるよう導きます。長期介護クラスにも協力し、受刑者に介護の技能を身につけるよう指導するので、家族の面倒もみることでできるようになり、実益を兼ねてい

ます。それらの成果は受刑者の心を潤し、同時に私にとっても夢を叶える支えとなっています。

ボランティアは未成年の受刑者が薬物やアルコール、タバコなどの依存から立ち直るよう協力し、家族に対し刑務所から出た後の彼らを心から受け入れてくれるよう働きかけています。また、出所した後も、砂絵クラスを開くなど、寄り添いも続けます。

現在、女性受刑者の収監施設では、大愛テレビなどの道徳教育に関するテレビ番組を視聴することができ、社会とのつながりが保たれています。今年八月

二十六日に、宜蘭刑務所の幹部ら三十二人は、女性受刑者たちが大愛テレビの番組を観た後に書いた感想を、静思精舎に送りました。そして、それに対する證嚴法師の開示と激励を聞きました。

宜蘭の慈済ボランティアはそれほど多くありませんが、宜蘭刑務所が必要とする時、いつも熱意のあるボランティアたちが自発的に応援に来ます。この一年に宜蘭刑務所で進歩した面があったとしたら、それは慈済ボランティアの無私の奉仕のおかげだといえます。すべてのボランティアの皆様に感謝の意を表します。

(慈済月刊六一一期より)

一滴の水は 一筋の光明に等しい

長年刑務所のケアボランティアをして思うことがある。

たとえ悔い改めた人の数は少なくても、

邪念を祓い自分を変えたいと努力する人がいる限り、

私は彼らの家族のような気持ちでそばにいてあげたい。

質問：何度も服役を繰り返す受刑者は少なくありません。更生の指導をしても無駄だと感じませんか。

陳：自分の家族からもそう聞かれたことがあります。この仕事を始めた当初、夫

と子供に反対されました。そのため、彼らに同行してもらって、私が刑務所で実際に何をしているかを知ってもらいました。二十年が経った今も、「随分長く続けているけど、効果はあった？」と聞か

れます。

受刑者への更生サポートは、すぐにははつきりとした効果が見られません。ではなぜこの仕事を続けるのかというと、それは例えば一滴の水のように、わずかな力でも毎日絶えず彼らの心に注ぎ続けられ、きつとよい影響を与え、いつか効果を発揮すると信じているからです。

逆に、もし水を一滴も与えなければ、将来別の社会問題を引き起こさないとも限りませんし、問題が自分や家族に及ぶかもしれません。この社会は絶えず動いています。もしかしたらある日、私が彼らに話した善念が縁を結んで根つき、芽

を出し育っていくかもしれません。

ですから、いくら困難や挫折を感じても、その水を与え続けることにこだわってきました。長年ケアボランティアをしてきて、徹底的に悔い改める人の数は確かに多くはないし、全ての受刑者が過ちを繰り返さないわけではないと知っていますが、正しい道に向かいたいと決心して頑張り続ける人がいることも知っています。五年間頑張ってきたのに、六年目に罪を犯して刑務所に戻ってきた人もいました。でも、考え方を変えれば、彼自身はよくなるうと思っていた時期があったのです。

暗闇にいる人に、たとえ微かであつても、光を差し向けたいのです。遠くまで照らすことはできないとしても、それは意義のあることだと思い、この二十七年間、私はこの仕事を続けてきました。

質問：「なぜ鉄は鋼にならないのか」と思い悩んだ時にはどうしましたか。

陳：挫折感はもちろんありました。刑務所から出た後、仕事が見つけれず、食事にも困った人がいました。彼はなんとスーパ―に入ってわざと物を盗み、刑務所に戻ることを選択したのです。やっと自由を手にしても、生きていくのはもっ

と難しいことだと分かっていなかったのでしょうか。

このような話を耳にすると、私は必ず率直に話します。加害者であろうと、被害者であろうと、法律違反で刑務所に入った以上、そのことはあなたの家族に痛烈な痛みをもたらしたのです、と。もちろん家族は寄り添うことで立ち直れるかもしれません。しかし、あなたが何度も刑務所を出入りすれば、そのうち心は折れてしまいますし、親が年を取り、待ち切れずに残念な気持ちを抱えながらこの世を去るのを見ることは、辛くて耐えられないことですよ、と話すのです。

質問：複雑な背景を抱えている受刑者にはどう接するのですか。

陳：初めて刑務所に入って、ステージの下の灰色や紺色の服を着ている受刑者と顔を合わせた時、思わず遠くの壁を見つめるばかりでした。彼らと目を合わせるのが怖かったです。あるボランティアは私をこう慰めてくれました。「怖くは

ありませんよ。あなたが彼らに優しく接すれば、彼らも優しくなると信じてもらなさい」

それ以来、私は慈済の制服に身を固め、ボランティアとして出入りをしながら、自分のよくない思い込みを徐々に克服してゆきました。今は、平常心で彼らのことを理解しようと心がけ、彼らと話をす



●ボランティアのスピーチを聞いた後、勇気を出して壇上に上がり思いを語った受刑者には、ボランティアから本が贈られた。

●台中の北刑務所の受刑者と話をする陳秀琇（中）と息子の鄭凱文（右）。家族の支えに感謝し、さらに勇気づけられてボランティアを続けている。

る時は、自分が話したいことを話すのではなく、相手が興味を持てるよう、分かりやすく話すようにしています。

質問：罪の報いを受けている受刑者に対して、どのように対応していますか。

陳：一般の人は犯罪者に法的な懲罰を与えるのは当たり前だと思っていますよね。確かにそうですが、多くの受刑者は間違いだと知って罪を犯したというより、その罪が後でどれほど深い悲しみを

招くか知らずに、一時的な欲望と無知によって犯罪に走るのだと気づきました。最終的に監獄しか行き場がなかったのです。

多くの人は友人に誘われて薬物に手を出し、自分の自制心を過大評価しすぎて元に戻ることができず、自分の体も親の心も傷つけました。中には、モデルガンに興味を持ち、それを友人に貸したところ、友人が改造して人を傷つけたので、連帯責任者として刑に服すことになったケースもあります。

仏教には、菩薩は因を畏れ、衆生は果を畏れるという言葉があります。凡夫で

ある私達は、いつも果報が目に見えてからようやく怖いことだと知るのです。

私は、更生支援を教育の一環として考えてほしいと思っています。彼らに悪い人間というレッテルを貼るよりも、社会復帰のチャンスを与えたほうがいいと思うのです。レッテルを取り除くことによって、希望がもたらされますし、逆にレッテルを貼ってしまえば、彼らは一生の罪の意識から逃れられなくなるのではないのでしょうか。私はすべての受刑者が出所した後、自分の家庭と社会に復帰して、その生命に価値を添えていってほしいと願っています。



生命力あふれる勇者―鄭傳杰 車椅子テニスの世界チャンピオン



ニューヨーク州ロングアイランドにある慈済人文学校では、ホウオウボクの開花シーズンに卒業式が行われる。そしてその時期に、学校の先生やボランティア達は、これまでの卒業生のことを思い出すのである。とりわけ、みんなの記憶に鮮明に残っているのは、アメリカ代表として車椅子テニスの世界選手権に参加した鄭傳杰(Nathan Melnyk)のことだった。彼は二〇一六年に慈済人文学校を卒業した。活潑で樂觀的、勇敢に自分と向き合う彼の姿が、すぐ目に浮かんでくる。

二〇〇六年、鄭傳杰一家はニューヨーク州ロングアイランドに越してきた。母親の鄭瑞杏さんは双子の息子を慈済人文学校に入学させた。ところが、二〇〇九年、鄭傳杰が九歳の時、自動車事故に遭遇した。一瞬の出来事だったが、重い障害が残り、彼の一生を変えた。

自動車事故で負傷した傳杰は四カ月間入院生活を送った。その上、当時応急手当の際、呼吸確保のために喉に管を刺したことが原因で、丸一年間声が出なかったのだ。これは九歳の子どもにとって、どれほど苦しく辛いことだったであろうか。

両親は手厚く看護をした。ようやく危険期を乗り越えた傳杰は、身体に受けた重

い障害を専門的な療法で治療するため、ニュージャージー州のリハビリセンターに移った。彼が高校に入った時、お父さんは仕事を辞めて全身全霊を傾けて傳杰のリハビリに付き添った。

リハビリから一年後、傳杰は慈済人文学校に戻って元のクラスで中国語の勉強を続けたいと意欲を示した。クラスメートは、彼のことを宝物のように大切にした。毎年開かれる「静思歌謡曲のコンテスト」では、必ず傳杰をステージの真ん中にし、傳杰のために曲を選んで、さらには

手話の動作を組み入れ、傳杰を中心とした演出に尽力した。

傳杰の人生が方向転換したことは家族にも影響を及ぼした。双子の弟の傳祺は内気な子で、いつも兄の後について行動していたが、傳杰が負傷してからは、一時も兄さんから離されず付き添うようになった。恥ずかしがり屋だった傳祺が一転して、兄さんが余計な怪我をしないようにと、先を予想して気遣うようになった。母親の瑞杏さんは、積極的に学校の愛心ママ友の会に参加していたので、傳杰を身近でケアした。瑞杏さんは、「彼はテニスの練習があるので、いつも学校を早退していますが、担任の先生にはよく理解と協力をして頂いたと思っています。同級生が傳杰の宿題を手伝ってくれたり、ボランティアがケアのために家に来てくれたり、私達一家は多くの人の愛に包まれたからこそ、無上の勇氣と強い意志で、障害に立ち向かうことができたのです」と感謝をした。

傳杰は毎週日曜日にテニスのレッスンを受けていた。リハビリのためにと、病院から勧められたからであった。アメリカの国家テニスセンターでは、障害者を訓練する専門のコーチがいるので、傳杰はテニスをリハビリとして訓練を行った。身体

●2006年、初めて弟とニューヨーク・ロングアイランドの慈済人文学校に入学した傳杰（左）は、慈済ボランティアのお姉さんと写真を撮った。



●2017年5月7日、鄭傳杰は、車椅子テニス少年クラスのシングルスとダブルス両種目で世界チャンピオンの座を勝ち取った。

はたくましくなり、テニスの技術も目に見えて進歩してきた。傳杰自身も自信が付き、トレーニングに一生懸命に打ち込んだ。心の中で、地獄の門の前で命拾いをしたのだから、この二度目の人生では意気消沈したり、自暴自棄になったりしてはいけないと思っていた。

傳杰がテニスの練習を休まず努力していた姿を見てきたお父さんは、勇気を出して彼の高校の校長先生とコーチ

のもとを訪れ、傳杰を学校のテニスチームに参加させてほしいと願い出た。瑞杏さんの記憶によれば、長い間傳杰はほとんどそばで試合を見ていただけで、出場のチャンスは少なかった。でも、傳杰は落胆せず引き続き練習を続けて自分のベストを保ち、根気強くチャンスが巡ってくるのを待っていた。

二〇一六年の高校テニスの試合で、アメリカFOXテレビの記者が傳杰に目を留め、特別番組を組み、「車椅子に乗った障害者として健常者の選手とテ

●2017年5月8日凱旋帰国。空港に迎えに来てくれたボランティアと記念写真。



ニスの試合をした初めての人」と報道した。そして彼の堅強な精神力と勇気を褒め称えた。インタビューの時に高校のコーチは、「傳杰は絶対休みません。練習の時間になると必ず彼の姿があります。傳杰が初出場して、健常者の選手と試合をした時のことは忘れられません。強く感銘を受けました。傳杰が真面目に努力する様子はチームにも大きな影響を及ぼし、試合を頑張ろうと皆で激励しあいました」と語った。

傳杰のお母さんは、ずっと子供に付き添ううちに、「明日が先にやってくるか、無常が先にやってくるか」を考えるようになったそう。そして積極的に慈済委員（慈済の幹部ボランティア）の研修と育成プログラムに参加し、二〇一五年に台湾に帰国して受証した。帰依した際に「慮依」という法号を授けられた。「人生は無常であり、今をしっかりと把握すべきだ」という静思語が、瑞杏さんにとって大切な教えである。彼女は書道や生け花や箏など、自分の習い事を通じて、他人の輪に入り、衆生を済度する架け橋になろうと努めている。

二〇一七年五月、傳杰はアメリカ代表として少年の部で三人の代表者の中の一人に選ばれ、世界車椅子テニス大会に参加した。家族全員が彼に付き添ってイタリア

のサルデーニャ島へ試合を見に行った。出発する前に慈済ボランティアは、彼を激励してケネディ空港まで見送った。瑞杏さんは随時スマートフォンを使ってイタリアの風景や試合の様子をアメリカにいる慈済人と分かち合った。皆も瑞杏さんの報告を楽しみにして、声援を送った。試合は非常に熱戦だった。傳杰は皆の期待に応えて、少年の部シングルスとダブルス両種目で、世界チャンピオンの座を勝ち取ったのだ。

優勝しても驕らず、負けても気を落とさず、傳杰はいつも陽気で自信満々に微笑んでいる。「無常に直面しても、自らの力で悲しみを乗り越え、人生の道程を歩んでいかなければならない」と覚悟している表情だ。実は、自分が勝ちたいのは、他人ではなくこの自分なのだ。

傳杰はこの九月に、ニューヨーク州立ストーニーブルック大学のコンピューターサイエンス学科に入学するが、テニスも続けたいという。これからも、彼は毅然として、自分の夢をかなえるため、勇敢に立ち向かって進んでいくだろう。

（アメリカ慈済世界二二三期より）



ベジタリアンヒーロー

インドネシアのジャカルタ・ニューカブ村に住んでいる施汪伸は、シンガポール国際学校五年生の生徒です。昨年、慈済の「七月吉祥月」という活動に参加して、菜食と殺生と地球との重大な関係について話を聞きました。ボランティアの黄暄荔が、「誰か菜食者になりたい人はいますか？」と聞

●汪伸は中国語教室で同級生に菜食すれば地球を救えると呼びかけました。



いた時、施汪伸は一番に手を上げました。「僕は菜食者になると決めました」

汪伸君の両親はジャカルタの慈済ボランティアです。母親の陳幸伶は、まだ幼い汪伸が菜食をすると言ったのは、一時の気まぐれではないかと思ひ、何回も「本当にお肉は食べたくないのね？」と聞きました。汪伸はきつぱりと「食べたたくないよ。自分で決めたことはやり通すから」と答えました。

汪伸は鶏肉が大好きな子でした。誓いを立てた二週間後、友人の誕生パーティーに呼ばれて行くと、そこには美味しそうなフライドチキンが用意されていました。彼は友人のお母さんに、「僕はベジタリアンだから、これらは食べません」と言いました。パーティーが終わって、ママが迎えに来ました。家に帰る途中、「ママ、僕、ご飯まだだよ……。パーティーの料理はフライドチキンだったから、おやつしか食べてない」と言いました。

その会話はママをとっても驚かせました。我が家の末っ子の汪伸のベジタリアンになる決意がこんなにも強かったからです。汪伸の決意に感化され、家族全員が菜食するようになりました。



食材を選び、地球を愛する

菜食に変わってから、汪伸は体に大きな変化が起きているのに気がついたそうです。最初、運動好きな彼は疲れやすかったが、しばらくして状況がよくなったのです。今では、食材に注意するようになり、おやつを食べる前には包装の成分表示もよく読みます。「肉の成分が入った調味料も口に入れません」

彼は同級生にも菜食のメリットを説明します。「野菜や果物を多く食べると病気になるにくいし、牧場で動物を飼うと動物が排出するガスが大気を汚染するし、飼料を生産する時も汚染になるんだ。菜食は地球を守り、地球の温暖化を遅らせることができるんだよ」。幼い彼にとつて、勇気を出して説明するのは一つのチャレンジですが、同級生は皆、暖かい拍手で応えてくれました。

汪伸君は大愛テレビの番組「人間菩提」で、上人の衆生に対する愛に感動し、人類が地球を守る一員となることに納得しています。「上人は毎日懸命に仏法を皆に教えています。上人がいなければ、僕も今のようになっていないと思います」

「友達皆、お肉を食べてい

ますが、僕の菜食する決意は変わりません。ベジタリアンであることに誇りを持っています」。人は誰でも善の念を持っており、実は菜食することは難しくないと汪伸君が言いました。「友達皆と一緒に菜食して、僕らの地球をもっと元気にしたい！ 僕にできるなら、みんなもできると信じているよ」

（慈済月刊六〇七期より）



●菜食するようになってから、汪伸は以前よりも活潑で、学校から帰るとママの夕食の支度を手伝います。

見えない心労

病弱の老夫婦が自閉症の孫を介護しており、

慈済は毎月生活援助金を支給しています。

家庭訪問の度に、ボランティアは、部屋はあるのに、

鄭さんの奥さんはなぜいつもリビングの椅子の上に座って眠っているのだろうと

不思議に思っていました。

「百年前に祖父が残した土と草で作られた家は、五十年後に老朽化が進んだため、父親がレンガ造りの家に改造しました。月日が経ち、風災に襲われ、レンガは腐敗し崩壊してしまいました。外が大雨のとき、家の中には小雨が降ります。

三十人以上のボランティアの皆さんが一つになって、我々が数年来抱えてきた心の痛みを取り除いてくださいました。今は風や雨を遮断し、安心して快適に住める住まいになって、本当に感謝しています。清掃の作業中、あるボランティア

が私に『志願して喜びを持ってやっていきますよ』と言ってくれました。実際経験しなければ、分からない体験でした。

心からボランティアの邱彩桂さんに感謝します。彼女が何度も足を運び、世話

をしてくれたおかげで、今日の夢が叶ったのです。居住環境が完全に整えられたので、悲観的になる気持ちを棄て、ただ楽観的に他人を助けたいと思うようになりました。体を大切にすることで仕事に

●1日がかかりだと思われた屋根の修理の仕事も多くのボランティアが参加し、リレー式でレンガを運んだため、半日で終わった。(撮影・施龍文)



使う力を培い、慈済に恩返しをし、もつ

と大勢の人を助けたいと思っています」

約二千字の一通の感謝状に、台中市北屯区にお住まいの鄭さんは、この半年間、慈済ボランティアと深く結びついた経緯

を詳しく綴ってくれました。

病人三人が頼り合う

鄭さんは今年六十三歳になりました。



●物を置いている2階と3階の天井が落ちてしまったため、ボランティアが片付けている。
(撮影・施龍文)

一九七五年に兵役を終えたとき、台湾十大建設という政府の政策により、南部・高雄の中国鋼鉄会社に採用されて、入社しました。生活が安定したため結婚し、娘が生まれ、ローンでマンションを購入しました。

仕事をして二十年が経ったところで、重症の糖尿病を患い、仕事ができなくなり、一九九四年に退職届けを出しました。同じ時期、娘が未婚で出産し、生まれた自閉症の孫を夫婦二人で育てました。

鄭さんは孫の世話をしながら、家のローンを返済するためにアルバイトをしました。コンピュータの修理から、レス

トランの皿洗い、幼稚園バスの運転手などをしました。奥さんも同様にアルバイトに精を出していました。

二〇一三年から、鄭さんは腎臓透析をするために週に三回病院に通い始めました。腕に瘻管ができてしまったために重い荷物を持てなくなり、仕事は少なくなりました。奥さんは体の具合が悪いにも関わらず、家計のために、アルバイトを続けました。

二〇一六年初め、家の貯蓄がなくなり、家のローンを払えなくなったため、家は差し押さえられました。また、奥さんの病気が悪化して、仕事ができなくなりました。

そのため、夫婦二人は仕方なく孫を連れ、生まれ育った三合院（台湾の伝統的な建築様式の住居）の実家に戻りました。

百年を超えた古い家は、あちこち壊れていて、三階の屋根は台風に飛ばされてしまいました。屋内から上を眺めると「一直線に天空」となり、大雨の日は、雨水が直接入り込み、階段に沿って一階へ流れ込みます。レンガも使用期限を超えていて、完全に風化し、水が浸透してしまっています。それに雨漏りがひどく、あるだけ全部のバケツを使っても足りないくらいでした。そのため、安眠できる場所はベッド一つ分もありませんでした。しか

し鄭さんの計算では、毎月七千六百元の厚生年金から生活費を引くと、もはや家を借りることは無理でした。

実家に戻って間もなく、鄭さんの奥さんは腹痛で地域の病院から台中慈濟病院に転院させられ、腹膜炎と診断されました。手術で腸の腫瘍を取ってもらい、集中治療室で治療を受けました。

鄭さんは腎臓透析の日以外の時間に皿洗いの仕事をして生活費をまかなっています。しかし、「家族三人の中で、自分は透析が必要だし、十七歳の孫は精神障害者です。今まで自分を含めた二人を介護してくれ、頼りにしていた妻も癌を患っ

てしまった今、これからの生活はどうなるだろう」と悩んでいます。

一人も欠かせない

「神様はどうしてこのように私たちを苦しめるのでしょうか。なぜ、まるで窓がすべて閉じられたように、息もできないほど苦しいのでしょうか。もう先は真っ暗だ、家族三人ここで終わりにした方がいいのかもしれない」と夫婦二人は医療費を払えないことで絶望していました。そのことを慈濟病院のソーシャルワーカーが知り、鄭さんに提案をしました。「重

大疾病の証明を申し込めば、健康保険から医療費をもらえます。足りない部分は、台中の慈濟病院が慈濟基金会に援助金を申請しましょう。そのほか、二十四時間の介護サービスも自己負担なしで利用できます」

鄭さんは、こんな助けがあつて、生き返った気がしたと話してくれました。「神様はやっと私たちのために一つのドアを開けてくださいました。私たちはやっと外へ出て行って、新鮮な空気を吸うことができるようになりました」。奥さんが入院中の生活は、まるで生気がなかったそうです。「三人は運命共同体です。一人も

欠けてはいけません。慈済の助けによって、妻は無料の医療を受け、生きていく意欲を取り戻しました。飲んだ薬も効いてきたようです」

鄭さんの奥さんが退院すると、慈済台中支部のソーシャルワーカーの通知を受けた台中北屯区の慈済ボランティア、邱彩桂と訪問グループが、二〇一六年十月から鄭さん家族のケアを始めました。毎月一万五千元の援助金を提供しました。

邱彩桂が家庭訪問をする、部屋とベッドがあるにもかかわらず、鄭さんの奥さんがいつもリビングの椅子の上で寝ていることを不思議に思っていました。後

になってその理由が分かりました。鄭さんは八人兄弟の四番目です。十数年前に父親が亡くなり、兄弟は各自に家庭を作り、事業を始めたので、続々と古い実家から引越していきました。九十一歳の母親には唯一雨漏りしない部屋に住んでもらい、介護ヘルパーを一人雇いました。そのほかの部屋はもう荒れて住めないのです、鄭さんの家族は小さいリビングに縮こまって寝起きしていたからなのです。

それを知った邱彩桂は心が痛み、ボランティアの仲間と相談して、鄭さん家族全員が安らかに暮らして病気を療養できるように、ソーシャルワーカーと建設の

専門家に自宅まで来てもらって、部屋を検査し、修繕の見積りを手配しました。

幸せだから なおさら奉仕する

鄭さんの兄弟全員が家の修繕に同意する署名をした後、慈済は工事の準備を進めました。邱彩桂は関連の手続きの申請で多忙のときに、自分の八十七歳の父親が末期の癌に罹ったことを知り、悲しみに打ちひしがれました。しかし彼女はそれが自然の法則であり、ボランティアの仕事を通じて死は誰にも訪れることだと理解していたので、気持ちを落ち着かせ

て修繕関連の仕事を進めました。

今年五月二十一日の午前八時から、約三カ月の修繕工事は始まりました。当日はまず屋根のレンガを交換するのですが、当初二十人のボランティアを希望しましたが、最終的には四十六人が来てくれました。大工の手伝いをする人、整理と掃除をする人、食事を用意する人など分担しました。

大工は屋根の上に上がり、風化して水が浸透し、すすだらけになったレンガを外し、慈済のボランティア達に手渡しで一枚一枚下まで降ろしました。師兄（慈済の男性ボランティアへの呼称）は皆完



●修繕が完成した後、ボランティアは足りなかった家具を足し、家族が安心して療養できるようにベッドを用意した。(撮影・施蘇玉珍)

全装備、帽子やマスク、手袋をつけて、日差しの下でキビキビと、屋根の上では慎重に仕事を進めました。

大工の予想では一日がかりの仕事が、人手が十分にあったので、四時間で完成しました。

そのほかにもう一つのグループのボランティア達は二階と三階の荷物の整理を担当しました。十年以上誰も住んでいなかったし、雨や風で壊れたため、埃だらけで、乱れていました。ボランティアはマスクをつけて、埃の嵐の中で、書籍や

いです」

ボランティアの蕭さんは若くて力持ちで、重い荷物があれば、いつも積極的に運んでくれます。彼は荷物を一つ一つ三階から下へ運び続けます。それからまたレンガの運搬を手伝っています。休憩せず^{スーシェ}に仕事を続ける理由は、「過去にも師姐^{スーシェ}(慈済の女性ボランティアへの呼称)達が来て、我々を世話してくださいましたから、これからは私も同じように人を助けたいのです」

科学技術印刷会社を経営している林衍束さんは、奥さんの廖玉琴さんと、子供の光宸さんと恩瑜さんの家族全員で手伝

生活用品や落ちてきた床の屑を袋に詰めて一階に集めました。使える机は綺麗に拭きました。整理された部屋は、明るくなり、快適になりました。

七十四歳になる慈済ボランティアの黄阿瑞は、首にマフラーを巻き、両手でゴミ拾いをしています。汗水を拭くひまもなく、服は汗で濡れたままです。彼女は頑張つて腰を曲げて仕事をしていました。少しも疲れを見せません。「奉仕しているときは嬉しいし、いろんな人に会って、福を大切にすることを知りました。この年まで生きられて、このように動くことができるから、できるだけ体を動かした

いに来ています。子供二人は大人に劣らない精神力の強さで廃棄物を集め、何回も行った来たりしては屋外へまとめています。

林衍束さんは自分の子供が汚れるのかまわずに仕事に没頭しているのを見て、こう思いました。「子供は奉仕の概念を普段から理解しているわけではないし、自分もボランティアをたくさんやっているわけではない。この機会に有意義なことをやりたいと思ったのです。家でテレビやコンピューターを見るよりも、子供達が今日感じ取った嬉しさはさらに深みがありますし、実りがあると感じました」

た。水槽を交換したり、ペンキの塗り替えもして、連続三日間工事は続きました。古い家は新しい服に着替えたようでした。鄭さんは透析患者なので、きつい仕事はできませんが、頑張って携帯電話で修繕工事の経過とボランティアが汗を出して奉仕している姿を撮影し、写真に残しました。「以前の環境から今の新しくなったことを家族や友達に伝え、子孫にも残してやりたいです。ボランティア達の大変な奉仕は、計り知れないほどの価値があります」

六月一日に、ボランティアは鄭さんのために新しくなった家で入居記念パーティー

古家のリフォームが完成

慈済のボランティアの邱彩桂は毎日病院で父親を世話しています。工事が始まる当日に、彼女もやってきて、掃除の仕事を手伝いました。「鄭さんとはお互いに信頼しあっていますから、安心させるためにここにやってきました。責任を果たしたいので」。数年間の家庭訪問を通じて、邱彩桂は「慈悲の心のほかに、忍耐力も必要です。支援を必要としている人にさらに実質的な支援を提供していきたいと思います」と語った。

彼は翌日三階の屋上と床を修繕しまし

イーを行いました。二十人以上のボランティア達は不足していた家具を運んでくれました。張慧君さんも団子をつくり、皆が健康であるよう祝福しました。

ソファアのセットや、机、テレビセット、ガラステーブル、棚、電動ベッドは二台のリサイクル車によって搬入されました。ボランティアは鄭さんの指示に従って、一つ一つを搬入して、置く場所を決めました。

ボランティアは電動ベッドのリモコンの使い方を教えます。それから気をつけながら、マットレスや布団をベッドの上に敷きました。王漪芬が鄭さんをベッド



●慈済ボランティアの王漪芬さんは、鄭さんの奥さんの隣に付き添い、話を聞いている（撮影\施蘇玉珍）

自分の家族のように思えば、自分の心も柔らかくなり、さらに優しくなれますよ」と。

鄭さんも王漪芬に、「何日もかかってやっと完成した感謝状は、自分の心にある感謝の気持ちを文字にしたものです。全てのボランティアの方に差し上げたいです。慈済は私達にとって生まれて初めて出会った大恩人です。私達に生きていく力を与えてくれました。体が丈夫になったら、孫を連れて慈済のリサイクルステーションに行き、一緒にボランティアをしながら、慈済のご尽力に恩返しをしたと思います」

に案内したところ、鄭さんはすぐに「このベッドはとても柔らかくて寝心地がいいです。背骨に優しくて、すばらしいです」と言ってくれました。

慈済ボランティア達はベッドを囲んで祝福の曲を歌いました。鄭さんは両手で感謝状を持ち、丁寧にチームの組長である胡嘉樺と汪宗斌に手渡しました。鄭さんの奥さんも体を支え、ベッドの上に座って、嬉しさにむせび泣きながら合掌して感謝の気持ちを表しました。

修繕の工事を担当した慈済ボランティアの羅立勝は、深く感動しました。「外からでは、鄭さん一家が緊急の助けを必要

としていることに気づくことはできませんでした。相手を思いやることで、や々と彼らの心の苦しみを感じたのです。我々が彼らを助けることができて、私も大変嬉しく思いました」

王漪芬は、「天井を見ただけで嬉しく感じます。以前の生活環境はとても湿気が多くて、ゴミで汚かったです。今はもう明るくなって清潔になったから、気持ちも変わりました」と慈済にすべて支えてもらい、言葉では言い表せないほど感謝しています。

王漪芬は、證嚴法師の法話を奥さんに話しました。「患者を自分の親のように、

【證嚴法師のお諭し】

生命の共同体を 護ろう

◎訳・慈願 絵・林淑女



生命の共同体として
一切の衆生をも愛する
人の苦を見て自分も苦しみ
人の喜びに自分も喜ぶ

人を愛するだけでなく
すべての命を護り
尊重して愛おしむこと

今年の国際慈済医会の年会は、十月三日から六日にかけて行われ、二十カ国・地域の慈済ボランティアが遠方から帰って来て花蓮に集いました。四百

人の会員は異なる地域からきていますが、共同の理念を持って、各々が自分の国や居住地で人々の命を護り、愛を以て人々が健康であるよう護っています。

フィリピン慈済人医会のメンバーは、施療を実施してから二十二年になり、延べ四十万人が恩恵を受けています。白内障、腫瘍に限らず手術の必要があればただちに行って、患者の苦しみを取り除いています。

台湾からはるか地球の反対側にあるブラジルでは、少ない人医会のメンバーが、延べ十七万人の患者を治療した

そうです。まことに感動しました。自分の能力を軽く見たり、わずかな力と軽視したりするのはよくありません。

年会の課程は科学、哲学、生理学、生命学にまたがり、講演者は体得したすべてを披露していました。また、各地の人医会メンバーが見たこの世の苦しみの話は、相互の励ましになっていました。ある若い医師は、この度帰ってきて年会に参加して、医療のアイデアだけでなく、さらに視界が開け、「人」としての医師について学ぶことができたと言っていました。

ある医師は、普通なら患者が病院へ

きますが、ホームケアの施療は険しい道を辿って、やっと患者の家に着きます。そこで見るのは病の苦しみだけでなく、生きていくのでさえ容易でない人、貧困や交通が不便で出てこられず、医者に診てもらえない人たちでした。たとえ診てもらったことができて、お金がなかったり、世話する人がいなかったりという状況です。

医療スタッフはこの状況を見て、感じるところがありました。ここへ来たのは無駄ではなかった、患者を診察しただけでなく、この世の多くの苦難を見て、自分の幸せに感謝し、さらに奉仕をしな

ればと思いを新たにしました。

毎年の中秋節には、世界中から慈濟人医会のメンバーが集まります。今年の月は姿を現してくれませんが、皆の心の月はまん丸でした。名月は空中に隠れていても、この世で法を実践するために集まった人々は、法悦に満ちています。菩薩の抜苦与樂とは、衆生が快樂なら菩薩も快樂ということ。 「人の楽に自分も楽あり、人の苦に自分も苦しむ」、「貴方の幸せに私は喜び、貴方の苦難に、私は忍びない」。この大生命共同体の連帯感を、皆さんは体得しているはずです。

天地の間で生息する生命の共同体は、自愛だけでなく、その愛は一切衆生に及びます。ただ人を愛するだけでなく、さらにすべての生命を庇護し、労り、尊重しなければなりません。

「無縁大慈、同体大慈」とは、無論相手と自分に何の関わりがなくても、他人が病苦を受けていることを捨てがたく思い、どんなに山深く辺鄙な所であっても肉体の疲労も甘んじて受け、精進するということです。診察が終わって、相手の心が安らぎ喜んだ時、自分も軽安自在になるのです。

この度、あなたは彼の病痛を取り除

きました。その次は、彼の心身と生活が安らかになるように整え、そしていつまでも付き添うのが人間菩薩です。生活面だけでなく、衆生と温かく付き合い、真心をもった無私の愛が「覺有情」ということです。

時代は変遷しても医道は不変
病人を親のように見なし
病を師とする

フィリピンのボホール島に住む二十一歳のレージェンは、幼い時から原因不明の病に侵され、ひどい脊髄側

湾曲によって心肺を圧迫されていました。彼女は父母と離れて祖母と暮らしており、貧しく病院に行くことができないのは天命だと思っていました。

二〇一三年十月、ボホール島にマグニチュード七・二の強震が発生して、甚大な災害を引き起こしました。フィリピンの慈済人はただちに被災地へ駆けつけ、被災者に寄り添い慰め、救済や支援建築までもしていました。救難救助活動が終わった今でも、この縁は続いています。

ボホール島の面積は台湾の十分の一に相当し、村に住んでいる人たちの大

部分は貧困者で、病気になっても医者に診てもらう経済力はありません。慈済人は施療を行う以外に、度々珍しい病気の患者をマニラの病院に送って治療しています。しかし、レージェンの脊髄は百四十度近くも曲がっており、状況も複雑なため、台北慈済病院で治療することになりました。

八月下旬にレージェンは、フィリピン慈済人の許惟楽に付き添われて、台湾の台北慈済病院に入院しました。そして整形外科の曾効祖医師によって、二段階の骨矯正手術を受けた後、八十五度の湾曲度から六十度に改善さ

れたので心肺機能への圧迫が減少しました。体力が回復した二年後に再手術をすることになっています。

この子が天命だとあきらめていたことは、哀れでした。しかし勇敢で忍耐強い彼女は、今では真っ直ぐに立てたことが嬉しく、希望が湧いてきました。

許怡楽は十月再び台湾へ来て、レージェンをボホール島へ連れて帰りました。ボランティアたちは自分の子のように労り、見守っていました。各科の医療スタッフが治療の過程で見返りを求めない細心の世話をしていたこと、そして事ある毎に感謝の気持ちを抱い

て、病人の治療をしていた自分もまた進歩したと思っていました。

医者には医者の道徳、師には師としての道徳があります。時代が変わっても、医療と教育は現在の生活に適応しなければなりません。ただし基礎の方向を変えるのではなく、原則は守らなければなりません。

生老病死は自然の法則ですが、この過程において誰も自分の生命の長短を図り知ることはできません。しかし、生命の価値を開拓することはできます。「病を診る時は親のように」、「病を以て師と為す」、「医道においては」精進、即ち生命の深さと寛さを開拓することです。

良き縁を結ぶことです。毎日の早朝に法を聴いて、講堂を離れる時、自戒しているでしょうか。礼節を守っていますか。自分勝手に、人と争っていないでしょうか。

煩惱とは時に、わずかなことから起ります。もしも習慣的に心の中で、「この人は私と意見が合わない」「私の癖はこんなだから」、「私はいま怒っているから気が静まったら話そう」と考えていたら、癖がおさまっても、間違いはすでに起きています。情のある人になろうと思っても、習気^{じっけ}を直す工夫をしない限り、人を悩ませ自分も悩む

群衆の中を道場と見なして、衆生の苦難を取り除き、人生の無常を明白に、さらに去りゆく時を大切にしなければなりません。心霊の空間を広げて生命の版図を超え、多くの生命を包容して、多くの生命の中に貴方がいることを知る。これこそが価値のある生き方です。

習気を直し

生命を転化させよう

良いことを話し

良いことをして

衆生に利益しよう

菩薩が群衆の中に入る、第一箇条は

のですから、菩薩行は成就するでしょうか？

仏に学ぶ者は学んだことを実行するものであつて、習気を改め、観念を変え、行為を変えて、人と人との関係を改善してこそ、煩惱から解脱することができます。再び無明に陥ったり、業を造ることはありません。

群衆の中に入って、衆生と善福縁を結んで、互いに喜びの心をもって、互いに尊重することです。もしも人を容認できない、あるいは他人の苦難を憐憫できず、人との福縁を願わないならば煩惱は避けられません。

あるボランティアが、「法師、どうし

て私たち皆は貴方様をこんなにも愛しているのでしょうか」と聞きました。

その時、私は「なぜならあなた達が私を愛する以前に私はあなた達を愛していましたから」と答えました。私には衆生のため見返りを求めないという願があります。私にできることは皆にもできます。仏に学ぶからには、仏がされたことを学ばなければなりません。

にっこり笑った微笑み、やさしい一言も良い事になります。それを積み重ねて模範に習い、大小問わず、日常生活の中では善に向かつて衆生に利益す

ることです。

災難が絶えない時

人心は警戒心を以て

天を敬い地を愛し

生態を復元すること

八月下旬にハリケーンハービーが米国のテキサス州を襲い、甚大な被害をもたらしました。各州の慈済人は順番にヒューストンへ救済に訪れ、政府関係者と話し合って、被災者が何が必要としているか了解した後、十月一日から二十七回の配付を行い、一万二千世

帯に現金カードと毛布、生活必需品を配付しました。そして、救難救助が終わっても、なお被災者に寄り添い、慰めていました。

慈済がテキサスで救済活動を行っていた時、今度はカリブ海を台風が続けざまに襲い、米国南部のホースセントマーティンなどの地域が被害を受けていました。ニュージャージー西部に住む済弘・慮容夫妻は、ヒューストンでのハリケーンハービー被害の救済に参加し終わって家に着いた途端、マイアミがハリケーンイルマの襲撃を受けて、多大な災害があったことを知りました。

しかも、当地のボランティアは少ないので済弘夫妻は、被害調査と配付活動に行こうと思っていました。

私は済弘に、もう年ですから二、三日休んでから行きなさいと勧めました。そして九月二十一日、彼はマイアミの被災地へ急ぎ、慮容は国を超えてメキシコの震災被災地の調査に行きました。

九月十九日、メキシコで強烈な地震が発生して、しきりに余震が襲う中、人々は恐怖の中で過ごしていました。現地は貧富の差がひどく、治安も理想的ではありません。慈済調査隊は当地で慈済支援を手伝う人を探して教

え、一緒に被災者を訪ねて、詳細に彼らの需要を聞いた上で、配付物が無駄にならないように注意していました。この過程では大変な苦労はありますが、人々がこの誠意を感じ取って、復興の力と希望になることを願っていました。

十月十二日から十六日にかけて、六百人近くの米国慈済ボランティアが花蓮の静思精舎へ帰ってきて、精進研修会に参加しました。各州の人たちは奉仕する中で経験したことを話し、皆はその優れた点を学んで欠点を改善したいと考えたようです。また、この風

誠委員の研修員や職員約二千人が活動していました。二日間の活動範囲には限りがありましたが、豪雨の中での困難な作業を克服して楽しくやっていました。

この豪雨は宜蘭、花蓮、東部に氾濫や山崩れ、土石流災害の被害を引き起こし、驚くばかりでした。米国ボランティアが台湾へ帰ってくる前夜も、北カリフォルニアで森林火事が発生して、近隣の住宅地が八万六千ヤードも焦土と化し、四十人が犠牲になり、五千七百棟が損傷して十万人以上が避難していました。

災害援助と募金などの経験も分かち合っていました。米国のボランティアたちは帰ったらずぐに被災地へ入って、助けを待っている多くの被災者のために長期援助の計画を立てると話しました。ボランティアたちは慈悲の心を立て、精進しながら絶え間なく衆生を労り、寄り添っています。分秒分かつたず着実に慈悲の心を以て行い、生命の良能を発揮しています。

台湾に滞在中、東北の季節風と台風二十号が共に影響し合って、東部に豪雨が絶え間なく降り続けました。そのような状況の中、米国慈済人と台北慈

地、水、火、風の大自然の威力に、人の力で抵抗することはできません。絶えず発生する災難はさらに警戒が必要です。どんな力が災難を防げるでしょうか。「二善は千難を破る」と言われます。普段から善念を積み重ねて、和の力を凝集させ、心を調和して正の方向へ歩いて行かなければなりません。

「大生命共同体」という連帯感を持つて、天を敬い地を愛し生態を大切にしておいて多病の地球を元に戻してあげましょう。皆さんの精進を願っています。

（慈済月刊六一二期より）

海外開拓者は刊行物で 慈濟を広めた

ネットがまだ普及しておらず、大愛テレビも開設されていなかった当時、「慈濟月刊」は海外に住む慈濟人にとって精神的な糧であった。それは彼らが開拓者として志業を展開する時の後ろ盾であり、社会の慈濟志業への認識を早めることに役立った。

一九八〇年代後半、台湾の企業は海外投資を始め、経営者は事業に伴って海外に移住した。彼らは住む場所は見つかっても、言葉や生活習慣が異なり、国情や文化にも違いがあるため、心の中ではい

つも孤独を感じていた。

一部の人は事業を展開するかたわら慈善活動をした。中には元から慈濟ボランティアであったり、縁があつて愛の心で第二の故郷に恩返しをするようになり、

別の形の信仰と精神の拠り所となった。

インターネットがまだ発達してなかった時代では、彼らは「慈濟月刊」を手にとって至る所で慈濟や貧困救済を紹介した。当初、それは志業を紹介する唯一のもので、刊行物には貧困や病の救済、募金リスト、證嚴法師の足跡、開示や智慧の説法などが記載されており、往々にして人々を感動させ、参加に導いた。

各国の志業はさざ波が広がるように発展すると同時に、月刊誌は波を大きくする効果を持ち、この半世紀、着実に助っ人としての力を発揮してきた。

「マレーシア

「慈濟月刊」を持って空路でマレーシアに

一九八九年、マレーシアで初めての慈濟ボランティアとなった葉淑美は現地就職していた。台湾に帰った時、上人に生活の不慣れを訴えたが、上人は「人が環境に適応すべきであつて、環境が人に適応するわけではありません」と励ました。

また、上人は「マレーシアにはあなた以外にも慈濟委員がおらず、慈濟精神を携えて大いに発揚しなければなりません」

ん。人の土地の上に立ち、人の空の下に住むなら、現地に還元し、貧しい人たちを助けるべきです」と言った。

当時、彼女は他人の借金を担保し、千六百万円（約五千五百万円）の負債を抱えていて、その上、夫が事故で負傷した。彼女に家計が重くのしかかり、四人の子供の養育のために身を粉にして働いた。そのうち、夫の会社がマレーシアに工場を建設することになって、子を台湾に残して移り住み、設置部の次長を担当した。

一人で異郷の地での辛さを感じ、夜には四人の子供を思って泣いた。しかし、現実を変えられないなら、自分が心の持ちよ

うを変えるしかない。師匠の指示通りに慈善活動を始めた。

葉淑美によると、彼女は口下手なため、刊行物を使って慈済を紹介した。彼女は台湾から戻る時、必ず重量三、四十キロの「慈済月刊」と隔月紙の「慈済道侶」を持って行った。預ける荷物にいっぱい詰め、両手に大きな袋を二つ持って飛行機に乗り、クアラルンプールで乗り換えてペナンへ向かう。

ある日、彼女はクアラルンプール空港から国内線空港に向う乗り継ぎバスで、間違っ

●マレーシアの慈済ボランティアがセランゴ州クアラクルバル地区の障害者施設を訪れた時に撮った記念写真。マレーシアの志業は葉淑美によって始められ、今では木の枝が伸びて葉が生い茂るように、会員は100万人を超えた。まさに、「一から無量、無量は一から」を象徴している。



気づき、バスから降ろされてしまった。

高速道路路脇に立って、走って来る車に手を上げ続けたが、誰も止まってくれなかった。晴れた良い天気だったのに、突然、雨雲がやって来て今にも大雨が降り出しそうだった。彼女は心の中で祈り続けた。「私は雨に濡れても構いませんが、慈済の刊行物を濡らすわけにはいかないのです。法を伝承するのに使うものですから」

しばらくして一台のタクシーがやって来て停まった。彼女が刊行物を入れた大きな二つのバッグを載せ、ドアを開めようとしたその瞬間に、バケツをひっくり返したような大雨が降って来た。

マレーシアはイスラム教国家で、中国

語の書籍を厳しく制限し、イスラム教徒に対する布教も禁じていた。葉淑美は英語が達者でなく、マレー語もできなかった。税関を通る時、いつも不安な気持ちに襲われた。税関職員が荷物を調べる時、彼女は説明できず、いつもあれやこれやで長い時間がかかった。ある日、会社の同僚と同じ便に乗り合わせ、税関での説明を手伝ってもらったおかげで、刊行物を没収されずに済んだ。

やがて、葉淑美と共に慈済の活動に参加する人が増えてきたため、刊行物の需要も増えていった。檀香寺の法師の協力を得

て、そこを刊行物の郵送先に指定したが、やはり税関に引き取りに行かなければならなかった。

李合鳳はいつも葉淑美と一緒に車で刊行物を取りに行ったが、税関で難題を吹きかけられることなく、順調に荷物を引き取ることができるよう、菩薩の加護を車の中で祈っていた。当時の困難と苦労は、数多くのマレーシア慈済ボランティアの心に深く刻まれた。

宝典として智慧を汲み取る

「早期、台湾からの刊行物は私たちの

精神の糧でした」。一九九三年、マレー

シア支部初代責任者となった郭済航は、「初め、葉淑美が彼を慈済に勧誘した時、とても苦勞していました」と言った。彼の家業はダンボールの製造で、葉淑美と仕事で知り合ったが、彼女は台湾から持って来た寄付金の領収書を大きな封筒に入れてきた。中には「慈済月刊」と本が入っていたが、彼は一度も封を開けることはなかった。

父親が亡くなって一回忌の時、彼は新聞に追悼文を載せようと思い、本棚にある本を全部出した時、封筒に入った『静思語』と何冊かの月刊誌を見つけた。あ

●マレーシアの慈済ボランティアは自国のケアだけでなく、国際災害支援にも協力している。ミヤンマーで発生したサイクロン・ナرجス災害では、緊急支援から長期的な付き添いまで、足を止めることはなかった。写真はボランティアが高温の太陽の下で、キョクタン郡ウイン村のケア世帯を訪問した時のもの。

る箇所を開いてみると、「生命は無常ですが、慧命は永遠です。愛は無限であり、精神は常に宿っています」という言葉が目に見え込んで来た。

「父は突然亡くなったため、とても辛い思いをしました。そこで『永遠』という文字を見た時、父がまだいるように感じました。父は確かに『無限の愛』の中

にいたのですが、当時、私は『慧命』が何なのか分かりませんでした」と郭済航が言った。呼応するように現れた文字によって、彼は慈済に対して好感を持つようになり、やがて貧困者訪問ケア活動に参加するようになった。一念の慈悲心が啓発され、上人の後を歩む決心をした。

一九九三年八月に花蓮静思精舎に行った時、彼は上人の手から観世音菩薩像を受け取ってマレーシアに戻った。それは「仏心師志」を引き継ぎ、全力で慈済志業を展開し、苦難に喘ぐ人々を救う機能を發揮していくことを意味していた。



郭済航は二十数年間、一冊も漏らさず、「慈済月刊」を読んできた。とくに「納履足跡」は、彼が最も注意深く読み、心に響く箇所があれば、下線を引き、ページを折って目印をつける。そして、非常に多くの慈済に関する情報や目標、方向、各国支部の発展状況や国際災害支援など、月刊誌の報道内容は仔細にわたって深く掘り下げられており、彼はそれを慈済全体の状況把握に役立てている。

「私は以前、あまり読書をしませんでした。慈済に参加してから読書が大好きになりました」と郭済航が言った。彼は

一滴の水が 石を貫通するほどの影響力

法脈精神に追随するため、真剣に「慈濟月刊」を読むようになった。その情報流通のスピードがネットやテレビには叶わないとは言っても、それを手に持つてじっくり読み、そこに秘められた意味を咀嚼して理解することができるのである。

「最も貴重なのは、『慈濟月刊』が報道している人物や出来事は、迷信からの目覚め、貧困救済または模範行動など、どれを取っても体験したことを文字にしており、文章を書いてから実践しているわけではないのです。故にどの文章を読んでも生き生きとしており、どれもが生きた人間菩薩の行動を表しています」

夫と共にマレーシア、マラッカで商売をしていた簡慈露は、一九九一年十二月に台湾に帰って美容院に行った時、何気なしに隔週紙の「慈濟道侶」を目にし、慈濟の善行に深く心を打たれた。その翌日、台北支部に行き、慈濟病院の病室二部屋分の病床に相当する金額を寄付した。そして、受けつけたスタッフに「マレーシアに慈濟ボランティアはいますか？」と聞いた。

年十月に彼女の付き添いで慈濟台中支部にいた上人と会見した。その時、ちょうど中部地区では榮譽董事懇親会が開かれていたが、会場の活気に満ちた雰囲気にも彼女も感化され、直ちにマレーシアにいた夫の劉濟雨に電話して、榮譽董事になって多くの人を助けたいと言った。劉濟雨はそれを聞いて、「帰って来てから話そう！」と彼女に理性的になるよう引き留めた。

彼女がマレーシアに戻り、台北で見聞きたことを聞いた後、会社の社長をしてきた劉濟雨はそれ以上、相手にしなかった。彼は妻が従業員を連れてあちこち

で忙しく貧困救済するに任せた。そして、彼女は故意か無意識か夫に話して聞かせた。「ある可哀想な身体障碍者に対してボランティアがどういうケアをしているか」「あるお年寄りが見えないのに水を担いで自立しており、とても敬服する」……。劉濟雨は聞くうちに、ケアケースのレポートを手にとって見たが、写真の撮り方が下手だと思った。撮影に長けていた彼は勇気を出して、「僕が写真を撮ってあげるよ」と申し出た。

その後、簡慈露がボランティアたちと訪問ケア活動をする時、劉濟雨が同行して記録係となった。彼は写真撮影や録画

だけでなく、レポートを書いて当時の刊行物に載せた。真正正銘の「三合一」ボランティアとなった。

一九九三年十一月、劉濟雨が静思精舎で上人に会見した時、上人の巨視的な志と優しい物腰を目の当たりにして、心から喜びを感じると共に敬服し、その場で帰依した。その時から上人の弟子となった。

後に劉濟雨は工場に隣接する土地を慈済の静思堂建設用地に寄付し、その数年後、縫製工場を閉めて、全力で志業に投入すると共に、工場跡地を慈済の施療センターと地域教育センター用に寄付した。「事業は良くても悪くても心配の種

でした。いつそのこと、布施してしまえば、得失に悩むこともなくなります」と劉濟雨が言った。

今、簡慈露はマレーシア・クアラルンプール支部の執行長で、ペナン支部の郭濟縁、ジッダ支部の劉濟旌、マラッカ支部の林慈恬らと共に、上人が期待している「愛に満ち、一丸となったマレーシア」を実現するために、マレーシア全土の慈済ボランティアと共に愛の募金を始めた。二〇一六年には百万人の会員目標を達成し、二〇一七年はさらに躍進して百四十万人以上を目指している。

この大きな実りに簡慈露はとても感謝

し、感動を覚えている。ボランティアは各地域で一軒ずつ回って愛の募金を募り、街の路地や市場では月刊誌を手に入り、道行く人や露天商に慈済の紹介をしているのを見かける。たとえ拒否されても臆することなく、人種を超えてマレー人やインド人を誘って善行している。この勇猛な精進は正に台湾慈済初期の「竹筒歲月」に携わっていた家庭主婦とよく似ている。

簡慈露は当初、「慈済月刊」を見て感動したため、今でも印刷されたメディアを重視している。一九九九年、彼らはマレーシア版の「慈済世界」月刊誌を創刊

し、マレーシアにおける慈善、難民ケア、施療、リサイクル活動及び実在の人物の物語などを報道しており、今までに二百号以上を発行した。

映像メディアは伝達力が大きくても、一瞬のうちに簡単に消滅してしまう。しかし、印刷メディアは音を出さずに説法し、その素晴らしい法はいつまでも新鮮で、役に立つものだと思っている。

現在、マレーシア版「慈済世界」の計画を担当している張傳溢は、「実際にどれだけの人が月刊誌を見て慈済に参加するようになったかを数字に表すのは難しいかもしれませんが、少しずつ影響する

ことは、水滴が石をも貫通するように、
少しずつ見えてくるものです」と言った。
張傳溢は大学生の時、慈青（慈済の学
生ボランティアチーム）に参加していて、
いつも月刊誌を読んでいた。「文字によ
る報道は深みと隠された意味があり、何
物もそれに取って代わることはできま
せん」と言った。編集部の同僚もよく、台
湾の「慈済月刊」関係者と交流し、訪問
ボランティアの実務経験を「人助け最前
線」というコラムに載せて報道している。
また、現地の人助けの話も選んで載せて
いる。「台湾の月刊誌と比べて、私たち

はまだ未熟ですが、報道を通じてより多
くの人が善行に参加するよう期待してい
ます」

インドネシア

善女が貧困救済を始めた

インドネシアでは数人からなる女性軍
が慈済志業を展開した。一九九三年、劉
素美は夫と共にインドネシアで靴の製造
会社を始め、子供たちはジャカルタの台
北国際学校に通った。台湾から来た慈済
委員の梁瓊とはそこで知り合った。

梁瓊はいつも台湾から「慈済月
刊」を持ち帰り、台湾からの奥さ
んたちがそれを回し読みしてい
た。劉素美の住まいは台北国際学
校のすぐ近くにあった。台湾人の
奥さんたちは子供達を学校に送っ
た後、彼女の家に集まっていたが、
やがて家に小規模な図書室ができ

●2002年に世紀の大洪水が発生した
後、インドネシアの慈済ボランティアは
現地住民と協力してアンケ川を清掃した。
それがきっかけとなって、慈済は現地の
華僑実業家たちによる恩返しを引き出し、
今では大愛村、学校、病院、テレビ局の
建設など、4大志業が揃っている。（撮影
／顔森沼）



た。劉素美は全ての月刊誌を番号順に並べて皆に閲覧してもらい、誰かが読み終わると元の場所に返し、また次の人が読むという具合だった。

「当時、月刊誌はとても貴重なものでした。インドネシア政府は中国語教育を禁じ、空港で中国語の本を持っていても没収されました」と劉素美が言った。異国に暮らしていると、中国語の文字を見ただけで親しみを覚え、中国語の新聞を見る時は広告まで読んだ。一種ホームシック的な感情である。そして、台湾に帰る度に彼女はスーツケースにこっそり月刊誌を数冊忍ばせ、発見されなかった時

は運が良かったと喜んだ。

彼女たちも慈済の活動を始めた。梁瓊、劉素美、高寶琴、張春鶯、李淑娟は養老院や孤児院の訪問から始め、次第にジャカルタの田舎に行つて、肺結核の患者に薬を施したり、栄養不良の子供達に食糧を与えるケア活動を行った。環境に慣れで、インドネシア語も片言しかできなかったが、笑顔で通じ合えた。

スハルト大統領時代、民衆の集会が禁じられた。一度、彼女たちが集まって案件を討論していた時、移民局と警察に目をつけられたが、後に善行していることを知ると、見て見ぬふりをしてくれるよ

うになった。しかし、ある日、情報局が台北国際学校の副董事長に事情を聞いたため、早く正式に許可をもらう必要があると感じた。

個別訪問や小規模の物資の配付活動から大規模な施療活動や学校の支援建設まで、初めの六年間は男性ボランティアが極度に不足していたので、女性たちがほとんどの任務を担当した。かつて台湾の大学で学んだ華僑の賈文玉は、その時に初めて参加した。彼女は勤めていた金光グループの創設者である黄奕聰と息子の黄榮年に慈済を紹介した。親子は台湾で上人に会見してから、従業員に対して慈

済の活動を手伝うよう奨励した。

一九九七年、アジアで金融危機が発生した。インドネシアでは多くの工場が閉鎖し、多数の解雇者を出したため、失業者が増加すると共に、その翌年、大規模な暴動が起きた。しかし、慈済の女性たちは台湾に避難することなく、長期ケア世帯の世話を続けた。

「暴動が発生する直前、私たちはジャワ中部で大規模な施療活動を行つており、数千人に奉仕していました。その晩、ジャカルタに戻ると、あちこちで焼き討ちに遭ったのを目にしましたが、怖いとは思いませんでした」と高宝琴が言った。

恐らく、戦争体験がなかった故にのんびりしていたのかもしれないが、事態が拡大するにつれ、その深刻さが分ってきた。

暴動が収まると、上人はすぐに智慧のある決断を下した。インドネシア現地で物資を買いつけ、八つの国から集まったボランティアが力を合わせて十万人分の米と物資を貧困者に配付したのだ。「インドネシアの問題は人種問題ではなく、貧富の差があまりにも大きかったからです」と上人は一言で問題の核心を突いたので、ボランティアは大いに敬服した。

二〇〇二年、ジャカルタが大洪水に見舞われた。高宝琴は「慈済月刊」に投稿

グループ創設者の黄奕聰董事長が呼びかけたおかげで、数多くの華僑実業家がこぞって寄付し、支援した。「ミスター・ノープロブレム」の郭再源はその時に参加した人である。

台湾版をコピー

「華僑排斥暴動は大きな警鐘でした。上人が私たちに指示したのは、愛で憎しみを止め、積極的に『恩返し』することでした」と郭再源は「慈済月刊」で語っている。

上人は華僑に対して、「現地で物資を

した。「溢れた水の中をゴムボートに乗り、泥の中を歩いて、六日かけて昼夜を通して作られた一万個のおにぎりを一つずつ被災者に手渡していました。緊急支援が一段落すると、米袋を使って風雨を凌いでいた二十人以上の大人から子供までのことが気にかかりました。嵐で家が倒壊したお婆さんはどうしているだろうか？」その行間に慈悲心が読み取れた。

洪水が過ぎても市街地は水が退かなかった。上人はアンケ川の清掃を指示し、「水の汲み出し、清掃、消毒、施療、住宅の建設」という五段階で行われた。当年八十歳を過ぎていた、人望の高い金光

仕入れ、現地で使う」原則を守るよう念を押した。とくに実業家たちが有する資源は多く、発揮できることは多い。彼は「キンカレン大愛村」の再建計画を引き受け、アンケ川沿いの不法住民を移住させると共に、地域内に施療センター、大愛学校、モスクなどを建設して被災者を入居させた。

そして、実業家たちは引き続き、発心して土地を買い、慈済パークの建設資金を募った。その中央には精神の象徴である静思堂が建てられ、両脇に病院と学校、そして、インドネシア大愛テレビ局も建てられた。それは慈済が台湾で展開して



●2015年、ネパールで大地震が発生した。インドネシア慈済人医会の医師たちは被災地で施療活動を行い、傷ついた被災者の体と心を癒した。

いる慈善、医療、教育、人文の四大志業建設と同じで、全てをインドネシアにコピーし、二〇二〇年に全て完成させる予定である。

「善行は人としての本分に過ぎません」。賈文玉は月刊誌でその言葉を見た。彼女は長い間、黄奕聰董事長の秘書をしてきたお陰で、数多くの実業家を慈済に誘うことができたのだ、と言った。「インドネシアの志業は迅速に発展しましたが、最初は種を蒔く人がいて、それに続

いて善意の華僑たちがいたからです」

現地の華僑として、インドネシア人と華僑の間の溝を埋め、誤解を解いて社会を改善することは、実は自分を助けることなのだ、と彼女は悟った。

郭再源によると、奉仕して初めて「得られる」のである。今、慈済はインドネシアでは既に信頼を得ており、災害が発生すると、政府はすぐに慈済に協力を要請してくる。双方は何度も一緒に他の国を支援してきた。ネパールを例にとれば、インドネシア軍は輸送機を提供して慈済のためにテントや毛布を輸送した。

現在のインドネシア支部の執行長であ

る劉素美は、「一九九八年の華僑排斥暴動での危機が転機に変わったのです。アンケ川の清掃も一大転機でした。慈済がここまで来られたのも、数多くの人に感謝しなければならぬのと同時に、縁が成就したからでもあるのです」と言った。

當時を振り返ると、女性たちが恐れを知らず、黙々と愛を行動力に変えていた。今はこんなにもたくさんさんの現地華僑が力を注いだおかげで、インドネシアの慈済志業は大きく輝き出している。それは「一から無量が生まれる」道理を立証したものである。(つづく)

(慈済月刊六〇九期より)



未来は現在の積み重ね

◎文・釋徳侃／訳・済運

福を積み、良縁を結ぶなど

無私の愛は日頃から培うものです。

菩薩の心は宇宙をも包み込む

七月、台風九号と十号が立て続けに台湾に接近し、南部に被害をもたらした。中でも屏東県の一部では三日間も冠水し、慈済ボランティアは軍の装甲車に乗って千食分以上の手作り弁当を深く冠水した地域に届けた。

證嚴法師はボランティア朝会で、台風が来る前は警戒すると共に敬虔に心を戒め、無事に過ぎた後は敬虔に感謝すべきだと開示した。

南部の近隣都市の慈済ボランティアは台風が過ぎた後、連絡を取り合って関心を寄せ、力を集結して奉仕した。晨語で「菩薩は地から湧き出る」という話があったが、それは心の底から誠意のある愛が湧き出ると言う意味で、自発的に家から出て苦難に喘ぐ人々を助けることである。「そういう無私の愛は日頃から培う必要があります。良い縁を結ぶと共に福は積み重ねなければなりません」

法師は愛のエネルギーが途絶えることなく広がり、持続することを期待している。「菩薩の心は宇宙をも包み込むほど広く、仏法で以て衆生と良縁を結ぶべきです。それはこちらが人々を受け入れるだけでなく、彼らの心に私たちがいるようになることで



す。これが愛の伝承というものです」

地球と共存

夏の気温があまりにも高く、欧米各地で森林火災が発生し、バルカン半島諸国では連日、四十度を超えた。二日のボランティア朝会で法師は、「皆、冷房の効いた屋内に留まり、外に向って排出される熱気が室外の温度をさらに上げています。それは竈のよくな異常気象で、人類の存在を脅かしています」と溜息まじりに言った。

「異常気象は耐えられなくなるほどひどくなっています。この地上に生活している限り、地球と共存しなければなりません。少し我慢し、節約すれば、資源を共に分かち合うことができ、地球の負荷を減らすことができるのです。製造業は自業自得で、この

まま目先の豊かさだけを追求していけば、将来、必然的にその報いを受けることになるでしょう」

昔の人は苦勞を厭わず励み、日常生活の中で心身の忍耐力を鍛え、潜在能力を発揮すると共に良能を奉仕してきた。

非常時の安全な道案内

四大志業体の責任者たちは志策会議の中で、情報系統の重要性を報告した。法師は志業の発展には時代と足並みを揃え、遅れてはならないことに同意するが、清らかな仏性を護り通すことを忘れてはならない、と言った。科学技術や知識に重点が偏り、道徳と智慧を置き忘れれば、この世の秩序は乱れてしまうからである。

教育は家庭と社会、国家の希望であり、幼稚園から大学や大学



院まで、大樹を育てるように、種から苗へと始まり、倫理道德の基本が固まるのである。

人文志業も伝播する機能を發揮し、正しい報道と人心の教育に努めるべきである。骨髓移植のように健全な人文の精髓を人々の心に移植し、その「造血」作用によって人文精神を發揚させるのである。

人文志業が気候の変化や災害發生の時に、大衆にライブで情報を届け、誰もが警戒心を持つようになるよう法師は期待している。また、災害調査や支援する慈濟ボランティアが災害や道路の状況を把握し、「非常時における安全な道案内」になることを望んでいる。

（慈濟月刊六一一期より）

慈濟大事記十一月……………

訳・済運

11・01	◎慈濟インドネシア支部と国連難民高等弁務室は共同で、アメリカキリスト教CWSジャカルタ支部に於いて103人の難民に歯科の施療を行った。
11・03	◎慈濟大学は「大学地域実践論壇」を催し、花蓮の農民を招いて農業に係わる問題点を聞き、産学合作によって農民の支援ができることを期待した。この論壇は花蓮の3つの大学が政府教育部の大学地域実践連盟補助金を受ける上で行われている「永続する食—環境保護を行う地域住民による経済推進計画」の一環で、慈濟大学、慈濟科技大学、東華大学の教師と学生及び農民の29人が参加した。

10・04

◎新北市永和区の慈済ボランティア6人が2人のペンキ職人を招いて、慈済の長期ケア対象である楊さんが新たに移った家のペンキを塗り直し、生活の質を向上させた。

◎慈済タイ支部は4日と5日、アユタヤの洪水被災者を支援するため、バンパイン県のココト村、バン普拉ブ村、バンブーン村、ワットヨム村、タラトクリアップ村、バンプラダン村及び大都市圏のサムパオロム町で配付活動を行い、3590世帯に米と医薬品などの生活必需品を配付した。

◎慈済マレーシア・クチン支部はクアラルンプール等の慈済人医会チームと共に政府の医療人員と合同で108人を動員して、4日と5日、サラワク州カムプンムディンとカムプントウバの2つの内陸の村で施療を行い、約300人の村人を診察した。

11・05

◎マレーシア・ペナン州は台風ダムレイの影響で連日の豪雨に見舞われ、重大な水害が発生した。慈済マレーシア支部は5日、災害支援調整センターを立ち上げ、慈済ボランティアは直ちに支援活動を始めた。被災地域で炊き出しすると共に、中央病院と日新独立中学校、韓江小中学校、韓江大学などで清掃支援活動を行った。

◎7月、フィリピン・レイテ州でマグニチュード6.5の表層地震が発生し、カナंगा町リザルとヒロトガン地区の住民は土石流の危険性が高まったため、別の場所でテント住まいを強いられた。慈済は現地自治体の要請を受けて被災者に仮設住宅を建てることになり、9月に起工して、本日、111戸の引き渡し式典が行われた。

◎シント・マールテン島の慈済ボランティアは学校から貧困家庭への支援要請の知らせを受け、本日、368世帯に対して米と乾物、衣類、

11・111	同日、慈済彰化支部は16人を動員して、双方の病院で負傷者とその家族を見舞い、緊急慰問金を届けた。 ◎アメリカテキサス州のハリケーン・ハービー被害で、慈済テキサス支部は本日、静思堂に於いてヒューストン市で被災したベトナム寺院の3人及び電話で支援を要請した被災者437世帯に現金カードを配付した。 ◎慈済ミャンマー支部はバゴ州アライ二村のアンテイクティ寺院学校で施療活動を行った。ヤンゴンとバゴからの14人の医療人員と34人のボランティアが400人余りの患者に奉仕すると共に、生徒たちに衛生教育を行った。 ◎台中慈済病院の許權振副院長は耳鼻科の医師で、長年、新生児の聴	
--------	--	--

11・110	◎9日、彰化県溪湖町西環路の鍋料理店でプロパンガスが爆発して7人が負傷し、道安病院とキリスト教病院に搬送され、手当を受けた。	11・06	◎花蓮慈済病院とシエラレオネの34軍事病院は、新型伝染病に対する人員訓練と臨床研究などの分野で協力し合う由の覚え書きを交わした。 ◎マレーシア・ペナン州は重大な水害に見舞われ、ケダ州、ペラ州、クランタン州、セランゴール州、ムラカ州などの慈済ボランティアは本日から、ペナン州バタールワース、ブキット・マータジャム、アイタムなどの被災地で清掃支援活動と物資の配付を始めた。また、慈済クアラルンプール支部から105床のジンスー多機能福慧ベッドと200キロの即席飯をペナンに送った。	サンダル等の生活必需品を配付した。
--------	---	-------	---	--------------------------

11・26	11・20	ら手分けしてペナン島とペライ州の7つの重被災地を訪れ、現金カードと見舞い品を配付する。 ◎花蓮慈濟病院循環器内科チームは中国廈門で開かれている「第8回海峡兩岸医療衛生交流協会心臓血管専門委員会年次総会」に招かれ、ネットワークを通じて参加した。複雑性冠状動脈の介入性治療の手術をネットを通して示範すると共に討論を行った。 ◎「2017年慈濟海外養成委員慈誠精神勉強会」が10月12日から11月26日まで花蓮、板橋、三重、台中の靜思堂の四カ所に分かれて開かれ、2000人余りのボランティアが20以上の国と地域から参加して、慈濟の「国際化、若年化、專業化、多様化」した成長の軌跡を示すと共に、「共に大愛で善行を行い、善の道を切り開く」ことで「慈悲喜捨、濟世救人」の使命を推し進めている。
-------	-------	---

11・18	11・17	11・12	力検査と人工聴覚に携わり、遺伝性聴覚障害データバンクを立ち上げた。彼は台湾を代表して数回、国際会議に参加しており、台湾の耳鼻咽喉科に於ける国際地位を向上させてきた。本日は中華民国医師会全国連合会から「台湾医療模範賞」、台湾耳鼻咽喉科学会から「台湾耳鼻咽喉科医師医療奉仕賞」を授与された。 ◎アメリカ慈濟基金会は2010年からロサンゼルスとNGOケアハーバーが催している大規模施療活動に参加している。今回の活動は17日から19日までロサンゼルス福祉展示センターで、内科、漢方、歯科、眼科の診療が行われ、歯科と漢方は慈濟が担当し、3日間に2000人を超える人が訪れた。 ◎11月上旬、マレーシア・ペナン州で洪水が発生した。慈濟マレーシア支部とマレーシア全土8つの州からの慈濟ボランティアは本日から
-------	-------	-------	---

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002
花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
FAX: 886-4-36021123
慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301
FAX: 886-3-8563604
台北支部
106 台北市忠孝東路三段 217 巷 7 弄 35 号
TEL: 886-2-27760111
FAX: 886-2-27761244
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ
総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885
カナダ
TEL: 1-604-2667699
メキシコ
TEL: 1-760-7688998
ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972
ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091
イギリス
TEL: 44-20-88699864
フランス
TEL: 33-1-45860312
ドイツ Hamburg
TEL: 49 (40) 388439
オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511
スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883
オーストリア Vienna
TEL: 43-1-7346988
南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365
中国蘇州
TEL: 86-512-80990980

香港
TEL: 852-28937166
フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3
ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001
ミャンマー Yangon
TEL: 95-1-541494
マレーシア
Penang
TEL: 604-2281013
Malaka
TEL: 606-2810818
シンガポール
TEL: 65-65829958
インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889
スリランカ Hambantota
TEL: 94 (0) 472256422
ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305
トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802
オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666
ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈済

2017年12月19日発行・252号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴
発行所 慈済基金会
〒112 台湾台北市北投区立德路2号
編集 慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・王麗雪
校閲 山田智美
電話 (886)02-2898-9000
FAX (886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部
〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16
電話 (03)3203-5651 ~ 5653
FAX (03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。 (日文組編集同人)



今年74歳の翁春子さんは、若い頃、台南の四草入海の近くに住み、ご主人とともに漁業を営んでいた。慈済の環境保全に参加し始めてからは、竹製のいかだに乗って漁に出るのではなく、回収物の引き揚げ作業を行うようになった。回収したヘルメットで作ったひしゃくを手に、満面の笑顔で、「これは主人の発明品なんですよ」と言った。

文、撮影・黄筱哲 台南市安南区



慈済ものがたり